現代美術家

笹岡由梨子さん

コロナをきっかけに自分を変える

メッセージ

操り人形に自身の顔などを合成する映像作品で注目され、海外の展覧会でも人気の笹岡由梨子さん。非現実の人形劇にデフォルメした現実をはめ込んでつくる世界観は、ユーモラスであり、不条理なようでもある。「これまでにない表現方法で、〝今〟という時代を切り取って見せるのが現代美術」という笹岡さんは、作品にさまざまなメッセージを込めている。

例えば、操り人形が生きている魚（アジ）をさばき、焼いて、食べるようすをノーカットで撮影したショートムービー『anima／正義の料理人』（2014年）。「食べる者にとっては正義でも、食べられる者にとっては不正義。人間社会にもこれと似た状況はある」といわれて何となく納得したが、仕事場の壁に「死」の付く言葉がたくさん貼り出されている意味を聞いて、その真意にはっとさせられた。

「孤独死であれ、殉死であれ、そして自死であっても、何らかの社会的な力による〝他殺〟だと解釈できるのではないか。であれば、そうした死を生む私たちや私たちの社会にも責任の一端があるのに、都合のいい言葉で死を他人事にしてしまっている。スーパーで売っている魚を、私たちが生きるために殺した〝死体〟ではなく〝食材〟とみているように、私たちは生命の尊厳という感覚がマヒしているように感じる」

笹岡さんはそのことに気づき、たくさんのドローイングをマインドマップのように壁に貼り出しているのだった。

『anima／正義の料理人』（YouTubeより）
操り人形芝居はチェコの文化を彷彿させる。欧米の西洋美術が席巻する現在、笹岡さんは東欧美術の力強さに魅力を感じ、ポーランドやロシアなどを拠点に活動を広げていきたいという。

先人から学ぶ

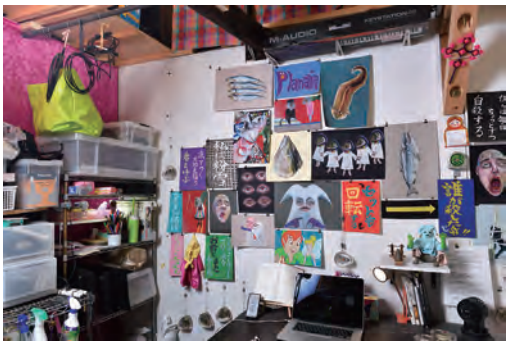
大阪府出身の笹岡さんは、京都市立芸術大学美術学部（油絵専攻）を卒業後、同大学院修士課程で油絵、博士課程でメディア・アートを専攻し2017年に満期退学。第19回岡本太郎現代芸術賞特別賞（2016年）、群馬青年ビエンナーレ2017大賞（2017年）、京都府新鋭選抜展最優秀賞（2019年）、令和元年度咲くやこの花賞（2019年）など、数々の受賞歴を持つ。母校で非常勤講師を務める一方、ロシアやポーランドなどでの滞在制作や、今年1月にはアジア最大級の現代美術アートフェア「台北當代（タイペイタンダイ／台湾）」に出展するなど、海外での活動も多い。

しかし、そんな日常がコロナ禍で一変した。出展を予定していた国際美術展が次々中止され、大学はオンライン授業になって学生とじかに顔を合わせることもできなくなった。全ての当てが外れて3〜4月は悶々と過ごしていたが、やがて、この期間を自分を変えるために使おうと気持ちを切り換えた。新たな表現方法を試したり、人に手伝ってもらっていた撮影や録音を自分でしたり、出展予定がなくなった分、締め切りに追われることなく作品づくりを楽しむことにした。

また、過去の作家が戦争や疫病などの苦境をどのように作品に昇華させたのか、それを知るために西洋美術史の本を再度読み返している。「コロナだからできないのではなく、コロナだからこそしなくてはならないことがあるはず。それを先人から学びたい」と前を向く。さらには、コロナ禍で制作意欲を失くしたり、アルバイトができなくなったりした学生たちの励みになればと、YouTubeへの動画配信も継続している。自身の作品づくりの苦悩や喜びを振り返る『笹岡ゼミ・前編』や家計の節約術など、現代美術家としてコロナ禍を知恵と工夫で乗り切るアイデアを発信している。

映像製作には出費がかさむ。そのために生活を切り詰めても苦にしない。むしろ、それを楽しもうという気概すらある。「落ち葉を食べてでも作家でありたい」。そういって微笑む笹岡さんに、関西の現代美術家としてのハングリーさと純粋さを感じた。

（ライター 三上祥弘）



自画像など数々のドローイングが貼り出されたスタジオ
（京都市・Vostokにて）